

〈マテリアリティ〉という視点の諸相

——「これは論文ではない」——

太田 茂徳*

Shigenori OTA

Aspects of 'materiality': "This is not paper"

0 はじめに

英語圏において地理学を人間生活の物質的基盤との関わりにおいて問い直そうと提起する動きが見られていたが（たとえば, Jackson 2000やLees 2002）、日本の人文地理学界においても「物質性／マテリアリティ／materiality」といったことが話題として挙がっているように見える。福田珠己も「物質性をめぐる問題について、近年、文化地理学において、盛んに論じられるようになっていく」（福田 2008: 32）としているように、その主戦場としては「文化地理学」という領域でなされているものだが、英語圏の研究動向と結びつけられて、新たな問題・関心を提示しているように思われる（たとえば, 福田 2008, 森 2009や森 2011）。しかし、「物質性／マテリアリティ／materiality」といった用語については、その重要性が指摘されることはあっても、その内容——どのような問題意識を持っているのか、どのような概念を扱っているのか、どのような成果を引き出しているのか——についての整理はまだ乏しく、「物質性／マテリアリティ／materiality」（以下では〈マテリアリティ〉と略して表記する¹⁾）がどのような問題と関連付けられるかについての明確な定義が与えられている訳ではない。

そこで今回、英語圏の文化地理学研究での動向に限定せずに、〈マテリアリティ〉に関する議論がどのような広がりをもって同時代的に存在しているのかを概観してみることにした。その際に、〈マテリアリティ〉という問題とは直接的なつながりは弱いのかも知れないが、「モノ Things」に関する議論も参照してみたいと思う²⁾。

1 〈マテリアリティ〉とは？

〈マテリアリティ〉とは、一体何を指して呼び掛けられているのだろうか？ 〈マテリアリティ〉を論じる際の射程というのは、どのくらいの広がりを持っているのだろうか？

〈マテリアリティ〉が、たんに「物質的性質」や「物質的な特性」を意味しているのであれば簡単なのだが、中島弘二が人文地理学においても「様々な観点から論じられており、決して一様ではない」（中島 2014: 19）と指摘しているように、実は〈マテリアリティ〉という概念・用語は明確な定義を持ったものではない。このことは、「定義が存在しない」ことを意味しているのではなく、「様々な定義が存在している」ことを表している。様々な学問領域で、様々な論点について、様々な論者が用いてきたのが〈マテリアリティ〉という概念・用語なのである。

哲学者の柏端達也は、現代形而上学の場面での（普遍者と対比される）「個物とは何であろうか」という問いに対して「個別性、具体性、物質性という三つの特徴をもつこと」（柏端 2017: 58）と指摘しながら、「物質性とは、その材質を問えることだと言えるだろう」（柏端 2017: 59）としている。この場合には、〈マテリアリティ〉は「素材性」という表現に近いものとなっている。また歴史的に振り返れば、一口に〈マテリアリティ〉と言っても、F. エンゲルスによってデューリング批判として語られた「世界の現実の統一性は、世界が物質的だという点にある。そして、この物質性は、二、三の手品師的な空文句によってではなく、哲学と自然学との長年の手間ひまかけた発展によって、証明されているのである」（エンゲルス 2001: 66）に代表されるようなマルクス主義理論に基づく人間の社会的関係を基礎づけるような「物質性」の捉え方もあれば、ポストモダンとい

* 無所属 (joshoota@mail.goo.ne.jp)

う文脈で語られるようなP. ド・マンによる「文字の散文的な物質性」(ド・マン 2005: 163)という論点もある³⁾。また近年では、情報経営学分野で「社会物質性 sociomateriality」という新たな言葉も聞かれるようになってきている(たとえば、Orlikowski 2010 やLeonardi 2013)。

『「物質性」の人類学』のプロローグにおいて古谷嘉章は、「物質性」という言葉は、多様な文脈で多様な意味で使われている言葉であるために、あまりに曖昧で結局、雲をつかむような話になってしまう危険性がある。実際、物質性について論じ始めるとただちに気づかされるように、関係する問題が非常に多岐にわたり、それを一緒にくたにして論ずると、問題が拡散しぼやけてしまって、議論が生産的にならない(古谷・関・佐々木 2017: 14-15)と述べて、「物質性」という領域の広がりを指摘している。これから考えていくことが、ここで指摘される「雲をつかむような話」にならない保証はないが、幾つかの手掛かりを得ながら、「モノ」あるいは「物質」をめぐる問題系の見取図の、ほんの一部を描いてみたいと思っている。

ここでは、〈マテリアリティ〉に関する作業全体を眺めることはできないので、人文地理学と関わりのありそうな、文化研究領域での〈マテリアリティ〉のいくつかの用法に注目してみることにしたい。

その第一の手掛かりとして、日本の人文地理学における代表的論者である森正人の定義から確認してみよう。森はその著書において、(物質展示として)「そこに存在している物もまた自明ではなく、選別され、配置されている。物はそこに存在することによって、特定のメッセージを伝える。これを「物質性」と呼ぶ」(森 2016: 3)と説明している。本稿では、この説明を導きの糸としていきたいと考えている。

ここにおいても、いくつかの解釈の可能性が存在している。「物質性」を「モノが伝えるメッセージ」との関連でとらえるとしても、そのメッセージを、選別し配置した人によって与えられたメッセージとして読み解くのか、モノがただ「そこに存在すること」によって不可避に伝えてしまう——ある種の表象不可能な——メッセージなのか、それらのすべてなのかといった具合である。森の考える「物質性」が担うメッセージとは何なのだろうか。そもそもモノの「物質性」は、何かメッセージを伝達することなのだろうか。それは(すべてのモノはメディアである、というような)「モノのメディアとしての側面・機能」ということなのだろうか。

ここにおいて確認されるように、〈マテリアリ

ティ〉として提示されるものには、メッセージとの関連で考えた場合にも、選別し配置する人々によって社会的に構築される局面(構築性)も考えられれば、モノがその素材や大きさ(=「そこに存在すること」)によって、モノを配置する人々の意図を越えて、不可避に提示してしまう局面(ここでは仮に「物質そのものの性」と呼ぶことにしよう⁴⁾)も考えられる。ド・マンの「物質性」解釈に見られるように、〈マテリアリティ〉を「理念的なもの」として捉えるのか「物質的なもの」として捉えるのかという解釈軸も存在している。これらが1つの座標軸をなしているのか、まったく別の空間をなしているのかも分からないが、こうした分裂を認めて見ていくことにしたいと思う。

その際、本来であれば「物質 matter」ということについての議論を整理しなくてはならないのかも知れない。それは、ここで考えているような〈マテリアリティ〉が、「本来、物質的でないものが物質と同一化される」——物象化や物質化といった——過程と関連がないとも考えられないからだ。また議論の前提として、対象とする世界を「物質だけからなる世界」として捉えるのか、表象や観念・理念などといった「それ以外のもの」の存在や役割を認めるのかということも関連しているだろう。対象とする世界の「物質」と「それ以外」との混合比率によって、「物質の重要性」を主張する意味合いが異なってくる⁵⁾。したがって演繹的に考えるならば、前提となる「物質」についての理解が進まなければ〈マテリアリティ〉の理解も進まないように思われる。しかしここでは、「何を物質として捉えるか？」に関わる議論については、人文地理学のみが関わる議論ではないだろうから、当座の間は棚上げしておきたいと思う。

2 〈マテリアリティ〉の文脈

上記までの概観で見えてきたのは、〈マテリアリティ〉に関する議論は、〈マテリアリティ〉を「物質」と「表象(観念)」という軸上のどこに位置づけるのかという点で、異なる議論が複合しているのではないかということである。ここでは、僕自身の勝手な分類により、いくつかの流れを確認しておこう。

2-1 モノの〈マテリアリティ〉

対象物のもつ材質や大きさ・形状といった「物質としての特性」といった性格をより強く意識する考えとして、民具のようなモノの研究に代表されるような、文化人類学における物質文化研究 Material

Culture Studiesが挙げられるだろう。こうした物質文化研究におけるモノの〈マテリアリティ〉をめぐる議論は、伝統的な物質文化研究への反省と、いわゆる「言語論的転回」以降の文化研究への批判として位置付けられるものである。

旧来の「モノ」に関する研究では、博物館に見られるような、道具などの形態や形式的な分類を行い、それを時間軸上に序列化することで技術の進化や発展を論じてきた。それは、マルクス主義の唯物史観を背景にした人類の進化を跡付ける作業でもあり、物質文化や技法の発生・伝播が論じられることもあった（後藤 2013: 1-3）。しかし、こうした物質文化への注目は、非物質的な「文化」への解釈学的関心で下火になったようである。したがって、1980年代以降に再浮上した〈マテリアリティ〉への関心は、文化人類学における解釈学的な研究、ポストモダンな研究への批判を足場としている。こうした批判に基づく物質文化への注目として——P. ジャクソンが社会・文化地理学を「再物質化」する必要性を述べた論文（Jackson 2000）でも注目している——さまざまなモノが時に国境を越えて移動し、モノが辿り着いたそれぞれの場面・社会的コンテキストの中で性格（どのように使われる／機能する／運用されるのか）を変えていく様子を「社会生活」として描いたA. アパデュライ（Appadurai 1986）や、大量生産された日用品の消費の場面に注目したD. ミラー（Miller 1987）といった研究が挙げられる。特にミラーの人とモノの関係を中心とした物質文化と消費の研究は、現在の物質文化研究の流れを語る上で大きな役割を果たしていると言えよう⁶⁾。ミラーは、それまでの物質文化研究では、モノがポストモダンの「価値のない、くだらないモノ」とされるか、あるいはマルクス主義理論によって資本主義的な搾取の産物として「抑圧的なモノ」と見なされてきたことを批判し、従来の物質文化研究に見られたモノを経済現象として分析することから、消費の場面で消費者が体験する意味の研究へと関心を移行させ、その上で「消費文化が我々に強いること」ではなく「消費文化が我々に及ぼすことや考えさせてくれること」に注意を払うことを求めている（Miller 1987: 167）。それは、「マテリアリティはそれを生み出す社会や文化の意味体系や文脈によって構成される面があることは否定しないもの、逆に社会や文化自体も特定のマテリアリティによって構成される面があることにも注目」（床呂・河合 2011: 12）することでもある⁷⁾。

こうした消費の場面でのモノを通じた社会や文化の意味体系に焦点を当てることは、福田（2008）でも

紹介されているように人文地理学にも影響を与えているのは明らかである。しかし、人々によって消費されるモノと社会が相互に構成しあっていること自体は、これまでも無関心であった訳ではないだろう。「どんなものを食べているか言ってみたまえ。君がどんな人か言い当ててみせよう」というのは、フランスの美食家ジャン・アンテルム・ブリア＝サヴァラン（Jean Anthelme Brillat-Savarin）の1825年の著書にある有名な言葉であるが（ブリア＝サヴァラン 2017: 414）、ある人が何を消費しているかを、その人の社会的属性やアイデンティティと結び付けて考えること自体は、決して新しい視点ではない。こうした旧来からの議論に対して現在の物質文化研究が批判を加えることを可能にしているのは、こうした「何を社会・文化と関連づけて論じるのか？」といった具体的な問題設定とは異なる背景と結び付けられるからである。

現在の物質文化研究の持つ批判力の源泉として、直接的には物質文化研究とは異なる流れではあるが、現在の〈マテリアリティ〉に関する議論に影響を与えている思想というものも挙げられる。上記のミラーの議論にも影響を与えているのが、研究対象となる世界を物質としての「モノ」のネットワークとして捉え、地理学でもD. リヴィングストン（2014）において参照されている、B. ラトゥールを始点として科学技術論においてM. カロンやJ. ローによって提唱されているアクターネットワーク理論（ANT）であろう（たとえば、カロン・ロー 1999）。ANTでは、あるもの（Entity）の形態や性質は、それと他のものとの関係の効果として生み出されるとされる。「あらゆるアクターの形態や性質は、常に他の存在者との諸関係（ネットワーク）を通じて生み出される」（久保 2015: 91）のであり、「ネットワークの運動を通じて様々な存在が現れ、変化し、消滅していく過程を追跡し記述するための方法論」（久保 2015: 91）がANTである。ANTでの議論は、様々な道具の使用・利用に注目するという点では物質文化研究と共通点が多いが、「モノのエージェンシー」という概念を用いて近代的な「主体」としての人間のあり方＝主体－客体の二元論への批判となっている。

また、道具の使用あるいは製作については、それに関わる人間の「熟練」が要求されるといった具合に、人々の「身体技法」に関わる対象として身体が重要視されることも多い。加藤幸治は、上記のアパデュライの議論を参照しながら、機織りという場面での扱う人々の身体や織機の素材に注目している（加藤 2010）。こうしたモノと身体との接点としての身

体技法に関する議論に接続するのが、「モノのエージェンシー」に注目するANTに対して、より人間の「身体」という側面をより強調し、「人間－環境」を連続的に捉えようとするJ. J. ギブソンのアフォーダンス理論であろう(ギブソン 1985, 佐々木 1994)。アフォーダンス理論の考え方では、「行為の可能性」としての意味や価値は、人間あるいは環境のどちらかに存在するのではなく、両者の間の相互作用によって人間の主観ではなく環境の側にあるように存在している。こうした視点は、環境決定論的な世界観を想起させることもあるが、モノや環境の「物質そのものの性」を想起させ、相互作用を通じて人間の「思い通りにならない」世界を描くことを可能としている。「人間－環境」関係を、身体を接点として連続的に捉え、環境の側からの身体への働きかけを重視することは、ANTと同様に、人間と環境をそれぞれ主体と客体に割り振る二元論への批判となっている。

こうしたモノの持つ「思い通りにならなさ」を強調しているのが(ANTやアフォーダンスという文脈とは異なるかも知れないが)、「我々が出くわすもの what we encounter」(Brown 2001: 3)としてのモノのあり方を指摘する、B. ブラウンの「モノ理論 thing theory」だろう。ブラウンは、「モノ」という語の、「身近にありつつ at hand」「理論的フィールドを超え出ている outside the theoretical field」という、両義的な性格を指摘する(Brown 2001: 5)。ブラウンは、「モノ thing/対象 object」という区別を導入し、モノの「無意義性」を強調する。そうしたモノに注目することで、「不活性な事物がどのように人間の主体を構成し、どのように彼らを動かし、どのように彼らを脅かし、どのように彼らと別の主体との関係を促進したり脅かしたりするかを考える」(Brown 2001: 7)ことを目指す訳である⁸⁾。

ここで重要となるのは、「モノ」としての道具に働きかける対象としての「身体」の存在であり、「道具－身体」の相互作用として道具の製作や道具の使用といったモノとの関わりを捉えようとする視点である。ここで、この立場からの批判の重要なポイントとなるのが、(自分自身の)身体や道具(広く捉えれば環境全体)と「主体」としての人間のあり方の関係であって、身体や道具が「主体」としての人間の「思い通りにならない」存在であるという点であろう。近代的な「主体」としての人間に対する「思い通りにならない」世界の存在、その中で人間の活動のあり方を捉える上で、モノの〈マテリアリティ〉という論点が再浮上しているとも言えるのかも知れない⁹⁾。

こうしたモノへの注目を通して、モノの「材料・素材」としての〈マテリアリティ〉が意識されていることが物質文化研究における特徴かも知れない。そこには、〈マテリアリティ〉＝「素材性」という側面があって、同じモノであっても素材によって生産プロセスや製作技法、流通や消費のされ方が異なるということが、モノの持つ意味とともに強調されるのである(たとえば、前田 2009, 加藤 2010)。こうした研究の中で〈マテリアリティ〉はどのように捉えられていたのだろうか。ミラーは大量消費物に注目し社会的に生産された「人工物(artifacts)」との関連において捉えようとしているし、河合香史は「音」を「タンジブルではない以上、物理的ではあっても、物質的、つまり「もの」とは言いがたい」ことを認めながらも「音が「もの」である可能性、すなわち音の物質性」を認めようとし(床呂・河合 2011: 356)、「ものの物質性」とは、五感を備え、それをつねに環境に対して開放している人間の身体との関係においてはじめて認知されるような「もの」の側面なのではないか(床呂・河合 2011: 357)として捉えようとしている。

現在の物質文化研究では同時に、研究対象を「意味を読み取られるべきテキスト」としてではなく、人間と相互作用するもの＝モノとして捉えることで、テキスト中心主義あるいは言語中心主義からの脱却という意図も考えられているようである(たとえば、青木(他) 1997: 4-5, 床呂・河合 2011: 8-10)。これは、ANTへの言及にも見られるような、批判として〈マテリアリティ〉に注目することの意味であろう。そうした批判において〈マテリアリティ〉は、これまでの研究において「忘れられてきたもの」として提示される。古谷は、「物質性」という用語の射程を「世界と人間が物質(matter, material)からできているという事実の全体である」(古谷 2014: 20)としている。これは「モノ」から成る世界を捉え、そこでの人間との相互作用の結果として物質世界を把握し直すものである。古谷は、「20世紀後半の文化人類学は、「意味の網の目」のなかに生まれ落ち、それを身につけて生きる存在としての人間に焦点を絞ってきた。そしてその「意味の網の目」つまり文化が多数であり、しかも優劣はないこと、その探究に専念してきたのである。そこでは、物質からなるモノより、それに人間が恣意的に付与する意味のほうが主役だった」(古谷 2012: 20)と振り返り、意味に対してモノが忘れられてきたことを指摘しながら、現時点の「物質」に注目する研究についても「しかし私には、その多くがまだ「モノ」(object/thing)の研究にとどまっ

ているように思える」(古谷 2012: 20)として、単なる「モノ」への注目だけでない「物質性」というパースペクティブを採用することを目指す¹⁰⁾。我々が住まう「この世界」を、「意味の世界」ではなく「モノの世界」として捉え直そうとする問題意識が、「モノ」研究において〈マテリアリティ〉——「物質そのものの性」を意識した〈マテリアリティ〉——を重視しようとする流れにおいて主張されているのかも知れない。

2-2 メディアの〈マテリアリティ〉

M. マクルーハンが「メディアはメッセージである (The medium is the message.)」として定義して以降のメディア研究 Media Studies という文脈でも、〈マテリアリティへ〉の関心は存在している。たとえば、松井広志は「メディア固有の特性を捉える際に不可欠であるにもかかわらず、メディアの存在論的基盤である「物質性」(materiality)についてはあまり考察されてこなかったように思われる」(松井 2015: 77)と指摘して、メディアの媒介性と物質性との不可分な関係について考えている。またメディア理論の文脈の中で水島久光は、旧来のマス・メディア理論が「メディアの透明性」を所与のものとしてメッセージにアプローチしていたのに対し、マクルーハンは「メッセージそのものにメディアの物質性が関与する」ことを描いてみせたと指摘している(水島 2016: 25)。この場合の物質性は、メディアの透明性と対比的に考えられている。ここで言われるメディアの透明性とは、どのようなメディア(媒体)を使用するかが伝えられるメッセージに対して影響を与えない、伝えるメディアと伝えられるメッセージとは無関係であるという想定を指しているだろう。それに対してメディアの物質性として語られるのは、メッセージを伝えるメディアがその内容に影響を与えること、さらにメディア自体がメッセージとして機能してしまうものであるという側面である。伝達手段としてのメディアが、伝達されるメッセージの内容とは「独立である」という点がメディアの「透明性」に関わる前提である。メディア自体がそれに込められた内容とは異なるメッセージを伝えてしまう理由が、見た目や質感といった素材が備えている性質によると考えるならば、それはメディアの物質としての側面に注目していることになる¹¹⁾。

その場合、メディアが見た目や質感を備えているのは、そもそもメディアが物質を素材として構成されているからなのだろうか。それでは、「メディアは物質性を帯びている」は「メディア=物質」であって「物質は物質性を帯びている」というトートロジー

になってはしまわないか。この場合は、批判の対象があくまでも旧来の「メッセージを歪めないメディア」という考えであって、メディアは「メッセージ」に対して「物質性」を発揮するというのが主旨であって、メディア自体が物質であることが忘却されてきたことが問題とされているのだから、このトートロジーは当たり前のことが忘却されていたことを批判していると考えられる。ここには、情報伝達過程を「情報源 information source」→「符号化 coding, encoding」→「通信路 channel」→「復号化 decoding」→「受信者」として、C. シャノンらによって20世紀半ばにモデル化され現在の情報通信技術を支える情報理論への批判も見えるだろう¹²⁾。こうしたシャノンのモデルでは、情報の伝送媒体である通信路は、外部からの「ノイズ」をいかにして排除するのかという問題の対象でしかなかったという意味では、透明な存在であったと考えることができる。それは、通信路としてのメディアがメッセージに介入しないだけでなく、受信者も送られてきたメッセージを一義的に「受け取る」だけの存在とし、能動的な解釈を必要としない図式でもあり、メッセージの内容は、送り手の意図に照らし合わせて「正しい」や「誤っている」と解釈されることになる¹³⁾。

このメディアの「非透明性」も、たんにメッセージに「政治的な色が付けれられている」という指摘だけではなく、メッセージの送り手に対する「思い通りにならなさ」のようなことまでもが意識されているのかも知れない。吉見俊哉が、「メディアとは何らかのメッセージを送り手から受け手に伝達する手段であるという考え方」への批判として「メディアは伝達しない」と表現していることも、こうした旧来からの図式・モデルに対する批判だろう(吉見 2012: 8-11)。それはたとえば、「ネットを通じてやりとりされるメッセージ」をめぐる議論にも見られるだろう。一時期、メールや掲示板のような「文字媒体」を中心としたネット上のメッセージが、そこに身振りや表情のようなコミュニケーションの雰囲気表現する情報を持たないために、容易に感情的な対立を生むなどの想定していなかったコミュニケーション現象と結びつくことが指摘され、そうしたコミュニケーションの情報を補うものとして「顔文字」の登場が語られたりした¹⁴⁾。携帯電話のメールでの絵文字やLINEの「スタンプ」も、メールやSNSといったメディアの特定の立場との結びつきとしての「色=政治性」ではなく、コミュニケーションの雰囲気を伝達しない(=ある種の情報の伝達を遮蔽してしまう)という〈マテリアリティ〉としての「非透明性」が意識

された現象であると言えるのかも知れない。

〈マテリアリティ〉という局面で論じられるメディアの「不透明さ」は、何か伝える側の意図を覆い隠してしまう、といった局面とは別の問題として受け取られるべきかも知れない。我々の身の回りに存在するモノたちは決して「物質であること」を隠していたりする訳ではない。たとえば新聞やチラシは、決して「紙」であることを隠してはいない。〈マテリアリティ〉には、「意図されたもの／意図されないもの」といった対比や、「表面的なもの／隠されたもの」といった対比とは関係ない、そこにあるはずの何かは伝わらない、逆に何かがメタ・コミュニケーション的に伝わってしまう——その過程に関わる人々にコントロール不可能な——という局面も含まれているように感じられる。

2-3 文化の〈マテリアリティ〉

これまで見てきたような〈マテリアリティ〉研究に対し、森らが分析の対象としている局面を、森自身の「文化の物質性」（森 2009: 5）という表現に倣うならば「文化の〈マテリアリティ〉」と表現することができるかも知れない。その大筋としては、森自身が特定のメッセージを伝えることを物質性の説明として述べていたように（森 2016: 3）、前述したメディア論における〈マテリアリティ〉の重要性の指摘といった流れに属しているとも思われる。人々の生活の中にある文化的な価値や意味を語る上で、そこに存在するモノたちへの注目が高まっている。

文化研究において「物質文化」への注目が現れる背景には、モノの〈マテリアリティ〉においても触れたように、文化研究における「テキスト中心主義」への批判があるだろう¹⁵⁾。伝統的な文化研究への批判として、19世紀以降に現れた写真や映像などの視覚的対象を扱う「視覚文化論 Visual Culture Studies, Visual Studies」が登場してきたと言えるのだろう。こうした動きは、文化研究の対象である「テキスト」を文学以外の対象——絵画や映像など——へと拡大したものであるとも言えるだろう。こうした拡大の延長線上に、当然ながら様々な「見られるモノ」も位置づけられることになる。

生井英孝は、1990年代から盛り上がりを見せる視覚文化論が使用する「視覚性 *visuality*」という概念について、「物の見方によって見えるものが見つかる」、「視覚の自明性を疑うということ——すなわち構築主義の立場で視覚を捉えるものである」という特徴を挙げる（生井 2006: 9）。この説明の論理をそのまま〈マテリアリティ〉にまで拡張するならば、物

質の自明性を疑い、構築されたものとしての物質の特徴を考えるものであるということになる。また前田修は、研究者によって異なる意味に用いられることもある〈マテリアリティ〉という用語を「物質の存在と認識についての概念を指す用語として用いる」として「私たちは目の前に存在する物質をありのままに認識しているのではなく、その物質が何であるかを主観的に解釈し、そこに意味を見いだすことで初めてその物質の存在を捉えているのだ」と説明する（前田 2009: 3）。これもまた、「構築された対象」として物質を捉えた考えだと言えるかもしれない。「物質の存在の仕方は、社会や文化によって異なることを意味する」（前田 2009: 4）ために用いられるのが〈マテリアリティ〉という用語であるのかも知れない。

こうした文化研究での文脈で〈マテリアリティ〉という用語は、物質（具体的には、様々な生産物や事物・道具）は本来の意味を与えられたものではなく、様々な局面において「構築される」対象であることを強調するために用いられている。こうした考えは、テキストが本来の意味を備えているのではなく、文脈の中で初めて意味を持つことを文学研究が指摘してきたことを、物質や写真や映像といった対象にまで拡大させているとも言えるかも知れない¹⁶⁾。

森は〈マテリアリティ〉について、（物質展示として）「そこに存在している物もまた自明ではなく、選別され、配置されている。物はそこに存在することによって、特定のメッセージを伝える。これを「物質性」と呼ぶ」（森 2016: 3）と説明していると同時に、「私たちが見ているものは自明のものではなく、特定の目的に応じて見せられているものである。こうした操作された視覚を「視覚性」と呼ぶ」（森 2016: 3）とも説明しているように、対象を特定のメッセージ・目的をもったものとして、その意味を読み解こうという方向性と〈マテリアリティ〉の問題とを結びつけている¹⁷⁾。森は、「その意味づけと物語化において、視覚イメージや事物は大きな役割を果たしている。どのような意図で視覚イメージや事物が選ばれ、配置され、特定の意味を与えられるのか。それを見たり触ったりすることで、どのような感覚や解釈を人々は獲得するのか。こうした視覚性と物質性の問題を、本書は「聖戦」を例に考えた」（森 2016: 258）としているが、こうした意味づけや物語化を担う対象を、通常の視覚イメージや事物と区別するために用いられているのが、「物質性」や「視覚性」という用法であると言えるだろうか。こうした問題意識は、メディアが物質的であることを忘却してきたことを

「物質である」と指摘し直す、メディア理論における「メディアの透明性」に関する批判と共有されているものだろう。

こうした背景からみた〈マテリアリティ〉という用語への注目は、物質文化研究あるいは文化研究という領域においては、「文化」として象徴体系やその意味が重視される中で、様々なモノがあることが当然のこととして意識的に捉えられることがなくなり、文化を日常生活の場面で構成する要素としての「物質」あるいは「媒体」の非透明性が忘却されてきたという「物質の自明性に関する想定」への批判として作用するかも知れない¹⁸⁾。

モノの自明性を批判し、その構築性を強調する姿勢は——物質としての側面と、文化的意味としての側面のように——モノの複層性を指摘しているとも言えるが、絵画や写真といった画像を扱う視覚文化論との関連で言えばE. フッサールの「像 Bild」に関する論考もこうした複層性を論じていると言えよう。「私たちに世界の有り様を「見せる」「媒体」」（小熊・清塚 2015: i）として「画像」を見るという経験は、フッサールが「事柄を非現実のものとして捉える意識、より正確には、「あたかもしかじかであるような」という仕方捉える意識のあり方」（小熊・清塚 2015: 5）として提示したものである。小熊正久は、「画布や台紙上の絵あるいは写真などを通して風景や人物を見るということ」を「画像表象」と呼び、ここにフッサールの考える3つの経験があることを指摘する（小熊・清塚 2015: 4）。フッサールによる3つの「像」の区別とは、①「物理的像 *das physische Bild*」または「像物体 *Bildding*」、②「像客体 *Bildobjekt*」、③「像主題 *Bildsujet*」である。最初の「物理的像」または「像物体」とは、「絵の具の塗られたキャンバス、写真の印画紙、テレビやコンピュータの液晶画面など、像を出現させる物体のことである」（小熊・清塚 2015: 24）とされ、手で触れたり持ち上げたりできる一般的な物体を指している。「像客体」とは、「像物体を通して実際にそこに見えている像のことである」（小熊・清塚 2015: 24）とされ、「見えるだけで、触ることも持ち上げることもできない（小熊・清塚 2015: 24）」対象とされる。田口茂は、こうした像客体を「像物体からも、像主題からも区別されるが、像物体や像主題なしには現出しない媒介的な交差現象」（小熊・清塚 2015: 28）として「媒介現象（小熊・清塚 2015: 27）」だとしている。最後の「像主題」とは、「像がその像であるところのオリジナルのことである」（小熊・清塚 2015: 24）とされ、目の前の「像」とは別のところに存在するはずの実体であ

る。素朴には「描かれたもの」と「実像」の対として理解されるのかも知れない像経験を、三層化して捉えることで、物体としての像物体とは独立しているのだが、「像物体（物理的像）の知覚なしに、像経験は成立しない」（小熊・清塚 2015: 31）という形で人間としての知覚と結び付けられた像客体・像主題という相互に独立した像経験を捉え直している。こうしたフッサールの考えにおいても、「像経験は、ある種の物的基盤に依存している。像を現出させる物体が除去されれば、像（像客体）も消え去る」（小熊・清塚 2015: 31）といった形で、ある種の〈マテリアリティ〉が捉えられているとも考えられる。田口が「像経験は、われわれの意志によって能動的に発動される経験ではなく、意志する以前に受動的に生起してしまう経験である」（小熊・清塚 2015: 33）と述べるように、知覚という人間の能力と密接に結びついた、人間の意志・認識によらない側面が「画像を見る」という経験自体に含まれていることを指摘している¹⁹⁾。ここでは、メッセージを伝達する〈マテリアリティ〉が関わる局面がどこに設定されるのかという新たな問いが引き出される。ある「像」としてのモノの提示は、メッセージの「ある／なし」、素のメッセージなのか構築されたメッセージなのかといったことだけでなく、たとえばフッサールの3つの区分ではどのレベルに関わるメッセージなのか——それがどのような経験なのか——ということも、〈マテリアリティ〉の問題として重要となってくるだろう。

2-4 身体の〈マテリアリティ〉

最後に、「文化研究」という文脈とは異なるかも知れないが、フェミニズムにおいて論じられる〈マテリアリティ〉についても、1つだけ確認しておきたいと思う²⁰⁾。

フェミニズムにおいては、従来から性 *sex* に関わる対象として「女性の身体」を取り上げてきたように「物質的身体」への関心を持ち続けてきたと言えるだろうが、象徴的なもの *the symbolic* の問題に過度に焦点を当てたために、物質的なもの *the material* の問題を十分に扱うことができていないという反省・批判が存在していた（大貫 2003: 114）。この際に、ポストモダンのあるいは社会構築主義的という批判を受けることになったのが、主体が絶えざる構築過程にあることを「パフォーマンスィヴィティ *performativity*」という概念を用いて説明する J. バトラーである。

こうしたバトラー自身が〈マテリアリティ〉というテーマを論じているのが、身体の物質性の問題を

扱った、*Bodies That Matter* (Butler 1993) であろう。J. L. オースティンの言語行為論の影響なども強く、構築主義者とも受け取られるバトラーが、〈マテリアリティ〉という文脈で取り上げられるのはどのような理由によるのだろうか。ここでは、単なる物質と観念・言葉の対比としてだけでは捉えられないものとして「物質」が想定されている可能性がある。

「身体」に、言説などの記号や観念に還元されない側面を求めることはフェミニズムにおいては古くから共有されてきた意識だろうし、旧来の身体観に対する批判を内包していたと思われる²¹⁾。簡略化して表現すれば、フェミニズムにおいては「ジェンダー／セックス」という対比が「構築性／物質性」という対比——これは「文化／自然」という対比と結びつきのだろう——を表していたとも言える。これに対するバトラーの議論自体は、「性的差異は、言説的実践によって何らかの仕方であらゆる形成されていることのないような、様々な物質的差異の一つの機能では、決してない」(Butler 1993: 1) と主張されるように、「ジェンダー／セックス＝構築性／物質性(あるいは文化／自然)」という図式自体の歴史性を問おうとするものであったようである。バトラーは、「すべてが言説ならば、身体はどうなるのか?」という批判に答えようとしているとも言える。

奥野佐子氏は、バトラーの言語観に触れながら「言語はある種の力を持ち、何がしかの効力を持つものである」という意味において、物質的なものとして捉えられる。こうした物質的で力学的な言語の作用に焦点を当てる概念が、パフォーマンス性なのである」(奥野 2006: 87) としている。ここでは、物質とは言えないものが実効力を持つ状態が「物質的」と捉えられている。藤高和輝氏は、バトラーの試みを「バトラー自身が「身体そのもの」よりも「身体の言説的構築」に焦点をあわせる傾向になるのも事実である」(藤高 2015: 196) としながらも、「極端な構築主義の立場」を批判していることを指摘する。このことは、「構築主義」を「言説決定論」、「言説中心主義」へと還元させないために導入された」(藤高 2015: 197) という「物質化 materialization」の概念に現れている。藤高はバトラーから、言説的構築の残余、痕跡、失敗として身体を捉える道筋として「物質化」を読み取っている(藤高 2015: 198-199)。こうした物質化の過程で現れるのが、「実態としての物質と区別し、自己同一的な存在者として実体化される物質を表す」(長野 2015: 98) とされる〈マテリアリティ〉であろう。同様に大貫孝学氏は、バトラーの「物質性」

を、「構築性」と対立するものではなく「いわば思考の前提として自明視されるがゆえに、思考から排除されてきたもの」(大貫 2003: 113) と説明している。

このような意味でのバトラーの〈マテリアリティ〉の用法は、前述した「構築性」を強調する考えと通底するものであると考えられるが、そこでも言説的構築の失敗という「思い通りにならなさ」が強調されていると見ることもできる。〈マテリアリティ〉という捉え方には、たとえ対象を言語的に捉えたとしても、我々のコントロールの範囲には収まらない側面があるという考えが含まれているのかも知れない²²⁾。

3 まとめとして

ここまで概観してきた上で、〈マテリアリティ〉についての理解は深まったと言えるだろうか。〈マテリアリティ〉をめぐる研究動向について、いくつか特徴らしき事柄を振り返っておきたい。

3-1 〈マテリアリティ〉が問われるのは

〈マテリアリティ〉の重要性が強調されるようになった背景にあるのは、「リアルであるために物質的基盤はもはや必要条件ではないかのよう」(古谷・関・佐々木 2017: 3) だからだろうか。モノが「当該の社会関係や文化システムのイラストレーション(例示)やトークンとされてしまいがち」(床呂・河合 2011: 9) だからだろうか。文化・社会的領域での〈マテリアリティ〉への注目の背景と考えられる要因の1つには、様々な現状の方法論に対する批判がある。ここまで概観してきたように、〈マテリアリティ〉という用語をめぐるのは、自明視され透明化されてきた物質的なモノの構築性を強調する用法から、人間の観念的・主体的営みに対して思い通りにならない、不可避な影響を及ぼす側面を強調する用法まで、様々な利用法が想定できる。なぜそのような幅広い使用がなされるのかと考えるならば、そこにはそれぞれの論者が展開したい「批判」があるからだろう。「〈マテリアリティ〉とは何か?」に関する答えは、各々の論者がそれによってどのような批判を行おうとするのか——批判を可能にする拠点として「物質」を利用する、批判のレトリックとしての「物質」——という点からも眺めることができる。ここでは、〈マテリアリティ〉・物質・モノを強調する議論を3つの批判として整理しておきたい²³⁾。

第一の批判は、研究対象を「言説」や「テキスト」として捉え、その多様な解釈を方法論的実践とした「言

説中心主義」あるいは「テキスト中心主義」的な方法論に対する批判であろう²⁴⁾。「極端に言えば、消費社会における主要な生産物は記号であって、物体としてのモノ自体は、意味を担う記号の付随物に過ぎないということになる」（大村・宮原・名部 2005: 184）というような、すべてを記号のシステムとして捉え、そうしたテキストを「読む」ことに集中してきた方法論に対する批判——世界は、ただ読まれることを待っているのか？——が、研究者と調査対象との関係性に関する批判やテキスト以外の対象の存在への捉え返しという形で歴史的に現れているのかも知れない²⁵⁾。こうした批判においては、〈マテリアリティ〉という用語は「テキスト性」や「記号性」などの用語と対立するものとして描かれている。

研究者が1つの対象を描こうとする際に、「対象についての言説・テキスト」のみが扱われる状況を批判する動きが、〈マテリアリティ〉に注目する動きとなって現れていると考えられる²⁶⁾。パフォーマンスなどの非言語的コミュニケーションに着目するN. スリフトの「非表象理論」(Thrift 2008)のように、非言語的なものを捉えようとする研究も、こうした批判の流れに属するものと考えられる。

第二の批判は、相対主義的・懐疑主義的な視点への批判である。これは第一の批判とも関連する内容であるが、研究者が捉えようとする対象を、社会的に構成されたもの、言語的に構築されたものとして捉える視点は、歴史や文化あるいは状況とは無縁の本質を想定する本質主義を批判するものであったが、「真実や真理を求めることはできない」といった極端な批判として作用することもあった。「○○は、社会的な構築物である」という主張は、「○○」の多様性を認め、そこに絶対的な優劣・上下関係を当てはめることを拒否する批判であるが、「すべては社会的な構築物である」という主張へとすり替えられた時から、相対主義の懐疑的なニヒリズムに陥ることになる。すべての主張は1つの物語となり、すべては構築物＝虚構とされてしまうならば、研究者の生み出すテキストは「1つの読み」でしかなく、「意味あるもの」とはなりにくい。こうした状況を学問的な「閉塞状態」と捉えることによって、世界に関する確かなことについて、研究者はアクセスできず、語るができないという雰囲気に対する批判が立ち上がっていると見ることができる²⁷⁾。

現在の「モノ」あるいは〈マテリアリティ〉への関心は、相対化された「1つの読み」としてではなく研究者の主張を裏付ける「確からしき」を求める流れの中で、重要性のある論点として浮かび上がっているこ

とが感じ取られる。こうした点は、人間の認識・思考という側面から見るのではなく、「知覚」という側面への着目に現れていると見ることができる。2-1でも触れた河合は当初、物質的であることを「タンジブルである」という点から捉えようとしていたが、音も物質性を有することを可能とするために「五感に働きかける」という形で物質的であることを拡張した。河合は、「もの」性としての物質性を、視覚や触覚だけでなく、五感に影響を及ぼすこととして捉えようとしたが、こうした捉え方は人間の思考・認識の恣意性に対して知覚の確からしさを議論の基盤におこうとしているように思われる。このように、自らの研究活動の基盤に確からしさを与える存在として「物質」への注目を考えることができるだろう。

最後の批判は、「人間のエージェンシーの特権化」への批判である。近年の物質文化研究において主張されたことは、「文化」を「上部構造-土台」という構図において反映として捉える従来のマルクス主義理論や、テキストの読みの1つとして捉えるポストモダン・ポスト構造主義理論のように単なる観念的な次元で捉えるのではなく、物質的基盤とも言える様々なモノあるいは人工物を使って行われる、我々の日常の実践によって生産される総体であるということである。人間がモノを使用することに注目することは、1つの実践を遂行するためには人間自身の能力以外の道具・人工物のもつ機能を活用することが必要だということへの気づきである。

こうした道具・人工物への関心は、物質文化研究だけでなく、「状況に埋め込まれた認知、行為という見方」(茂呂(他)2012: 15)を採用する活動理論(activity theory)や状況論(situative perspective)と呼ばれる研究領域にも共有されている(上野直樹 1999, 香川秀太 2011)。石黒広昭は、「文化とは、複数の人びとが何らかの人工物(アーティファクト)を介して協働しあう過程とその所産であるとし、通常それは世代間で改変されながら継承されるもの」(茂呂(他)2012: 11)としている。そこでは、「静的な所産として見える人工物も、それは実践が生み出したものであり、実践過程の中で固有の意味を帯びる。ゆえに、人工物は物質的であると同時に観念的なものとなる」(茂呂(他)2012: 11)というように、ミラーらに代表されるような大量消費財への注目と重なる視点がある。ロシアの心理学者L. S. ヴィゴツキーの考えによれば、「活動 activity」とは「生存のために必要に迫られた実践であり、その実践を通して私たちは何らかの事物を産出する。この事物産出を通して現実世界は作り替えられると同時に、この作

り替えが私たち自身にも変化をもたらす」(茂呂(他)[2012]: p. 4) というものであり、そこでは様々な「道具」が重要な役割を演じている²⁹⁾。こうした意味における活動に注目することは、道具を利用した人間による環境の改変と、作り替えられた新たな環境への人間の適応という「作り-作られる」関係を表現するものでもあり、本稿での「文化」というテーマとは異なるかも知れないが、ここまで見てきた〈マテリアリティ〉に関する議論とも近い論点があるように感じられる。

また、日常生活の物質的基盤をなす様々な道具・モノを通した「文化の生産」への文化研究での注目は、モノが人間あるいはその他のモノに働きかけて文化を生産・再生産する側面を強調する「モノのエージェンシー」という主張とも結びついていた。そうした関心において、現時点で思想的基盤の役割を担っているのがANTであろう。現在では「モノのエージェンシー」という考えは、「人間-非人間」といった二分法を乗り越えるような、デカルト以降の西洋近代の伝統的の二元論を批判するものともなっているようである²⁹⁾。

こうした批判は相互に関連付けられることによって、大きな思想的転換を表現するものとして、より多くの論者の関心を惹き付けているのだろう。

3-2 物質が文化研究にもたらすもの

ここまで、批判としての〈マテリアリティ〉への注目のあり方を、限定的にはあるが、振り返ってみた³⁰⁾。

ところで、論者による〈マテリアリティ〉をめぐるニュアンスの違いの存在を認めるにしても、そこで展開される批判が「物質」という1つの用語に結びつけて考えられなくてはならない、共通項のようなものはありうるのだろうか。そうした共通項を考えるヒントとして、河合の論考を振り返ってみることにしたい。河合は、「音はものか」という問いを通じて「ものの物質性とは何なのか」という根源的問いに向き合っている。そうした問いの中で「ものの物質性」とは、五感を備え、それをつねに環境に対して開放している人間の身体との関係においてはじめて認知されるような「もの」の側面なのではないか(床呂・河合 2011: 357)」と、人間の五感と相互作用することが「物質性」という側面だと捉える訳である。そうして視覚・触覚の対象としてのモノから五感に捉えられるモノとして物質性を掘げようとした河合の論考は、「物質」と考えられる範囲をどのように設定するかが、こうした研究において重要なポイント

となっていることを示している。〈マテリアリティ〉が「物質」に関わる問題であるならば、「物質」をどのように定義するのかによって〈マテリアリティ〉が採りうるあり方が左右されることになるのである。そこから引き出されたのは、「知覚の対象」としての「物質」という考えである³¹⁾。「物質=知覚可能な対象」という図式は、知覚が人間の身体的な機能であって、疑いようのないものであるという考えとも結びついているかも知れない。こうした考えは、「物質」についての1つの定義を思い起こさせる。それは、「物質とは、人間のその感覚においてあたえられており、われわれの感覚から独立して存在しながら、われわれの感覚によって模写され、撮影され、反映される客観的実在を言いあらわすための哲学的範疇である」(レーニン 1956: 150)という、自然科学の要請に依拠したV. I. レーニンの物質概念である³²⁾。これは物質を人間の「感覚の対象」として捉える1つの物質観であり、河合は言及していないが、河合の考えと同型であると思われる。こうした「物質」観の特徴は、物質という対象を「人間の認識・感覚から独立している」とみなすこと、そして同時にそれらの対象が——視覚・聴覚・触覚など——知覚によって捉えられるとされることである。このことは、物質という対象を「客観性」と「実在性」を有する対象として想定すること——そして人間の知覚を「客観的実在を反映する」作用と想定すること³³⁾——を意味してはいないだろうか。

ここに、前述した2つめの批判の意義があるように思われる。

「物質を対象としている」と主張すること、それは同時に、研究対象として、研究者の認識や思想によって動かされない、客観的な「所与の世界」を再主張し、言語に依存する方法論ではアクセスできない対象に「我々はアクセスできるのだ、アクセスしているのだ」と主張することを暗に訴えることで、言語的方法論への批判となっているのだ³⁴⁾。泉谷洋平が「懐疑論的ポストモダニズム(泉谷 2003: 3)」として述べた言語の恣意性の強調に対する批判を、ここで取り上げた物質観と関連づけて「言語/物質」という対比として描くならば、それを「言語=虚構/物質=現実」という図式で描き直すことで、物質を対象として取り上げることによってリアルなものにアクセスしているという主張として読み解くこともできる。

こうした、「物質を扱うことはリアルなものとのつながりを確保することである」という主張は、人文地理学という学問的主張の確からしさを確保する上でも意味を持つだろう。我々の世界を「ことごと

く物質で構成されているのは論をまたない」(益田 2015: 373)」とする益田理広のような議論ではなくても、世界で観察される具体的な個物が全て「物質でできている」とする主張は、たとえ言語論的転回と呼ばれる状況を通じた後であっても受け入れがたいようなものではない。森川洋は、ドイツ語圏での伝統的地理学において「空間は、長らく「物的に充填された地表面」の一部とされた」(森川 2004: 123)としているが、こうした感覚は島津俊之が「建築物や街路や公園といった物的 (physical) なモノの連続体」(島津 1993: 55)として「空間という構成要素」を切り出してみせることと振る舞いとしては連続している。このように、人文地理学においては物的なモノの集合を自らの研究対象としてきた伝統が存在しているため、今回見てきたような〈マテリアリティ〉に関する議論に注目することは、そうした伝統に現代的な視点から新たな意味づけを与えることを可能にすると考えることができる。

4 最後に

ここまで、思いつくままに〈マテリアリティ〉という概念・用語について概観してきた。ここでは「物質文化研究」「メディア文化研究」「視覚文化研究」と分類して見てみたが、こうした研究分野の独立性ははっきりしたものではなく、多少の注目点の違いを誇張したものでしかない。それでも、自然科学や哲学といったものを除いた、広く「文化」に関わる研究において〈マテリアリティ〉を扱おうとする場合にも、「物自体」としての特質を意識したものからモノの「社会的な側面」としての構築性を意識したものまで、そのあり方が多様である。こうした多様性の前では、「〈マテリアリティ〉という用語の下での議論に統一性はあるのだろうか?」と、古谷が『「物質性」の人類学』において指摘していた状況が依然として残されているような、困惑するような結果となった感は否めない。こうした困惑は、ここでの整理に特有のものではないかも知れない。T. インゴルドは、2002年11月にニューオリンズで開催されたアメリカ人類学会の年次総会での「Materiality」と題されたセッションに出席した際の困惑を表しているが、〈マテリアリティ〉をめぐる問題は「マテリアリティを理解するためには、可能な限り素材から遠く離れていく必要があるようだ」(Ingold 2007: 2)というインゴルドの戸惑いにも表現されているのかも知れない。インゴルドは、「発表者の誰もが、マテリアリ

ティが実際にどのような意味を持つのか、について言及していませんでした」と述べて、「私は認めますが、ほとんどの場合、彼らが話していたことはチンプンカンプンでした」と告白することになる (Ingold 2007: 2)。

インゴルド自身は〈マテリアリティ〉という用語を知らなかった訳ではない。自分の考える〈マテリアリティ〉とはかけ離れた用法に戸惑っているのかも知れない。このことは、多くの研究者が〈マテリアリティ〉という用語を使用しているが、お互いに共通する理解を作り出せていない状況を表現してはいないだろうか。そしてこうした状況は、インゴルドが感じた2002年から古谷が2017年に「あまりに曖昧で結局、雲をつかむような話」と記した時点でも変わっていないのかも知れない。文化地理学に影響を与えたと考えられる文化人類学においてもこうした状況なのだから、人文地理学で〈マテリアリティ〉という用語についての説明が不十分だからと言って非難されることではないのかも知れない。

ここで僕は、こうした困惑に対して、何か1つの定義を与えることによって解決しようと提案したいのではない³⁵⁾。なぜなら、既に「物質性」という用語は、特に断りもなく様々な文脈において用いられる学術用語となってしまうからだ。そうした現状自体をひっくり返すことはできないが、近年の〈マテリアリティ〉に関する議論が、旧来の「物質文化」をめぐる議論との差異を強調するのであれば、議論の中での〈マテリアリティ〉の利用法についてセンシティブでなくてはならないのは確かだと考えられる。そうした点から、各々の論者が「この場ではどのように論じているのか?」を明確にすることによって論点を整理し、議論を生産的に活性化することが必要に思われる。

では議論への参加者は、そのために何ができるのだろうか。柏端は、議論がなされる場面でのルールの設定について、「ルールの共有は、相互的な批判の可能性を高め、主張を単なる信条告白にさせない効果がある」(柏端 2017: 26)と指摘している。現在の我々に必要なのは、〈マテリアリティ〉についての最終的な結論を導くことではなく、こうした意味での「ルールの共有」のための作業である。我々が目指すべきなのは、〈マテリアリティ〉に関する研究者それぞれの個人的な信条告白ではなく、「〈マテリアリティ〉とは何であるのか?」や「〈マテリアリティ〉という理論的道具を使って、何を成し遂げたいのか?」に関する議論を開始できる土俵作りである。

そういった作業過程としては、森(2016)あるいは

中島(2014)のように、自らの依って立つ「物質性」の定義を明示して議論を進めることは、インゴルドの批判への対応としても有益だろう。我々は、関心・興味を共有する同士の排他的なサークルを作りたいのでなければ、議論をどのようなルールに従って進めているのかについて、もう少し親切であってほしいように思うのだ。人文地理学にとって〈マテリアリティ〉が有益な議論となるのかは、今後の議論の行方に委ねられている。

最後に、答えのない問い掛けをして終わりたいと思う。

人文地理学の学問的対象として、空間的な概念——それは空間や場所、地域や景観など様々であるかも知れないが——で表されるものは、果たして「モノ」なのだろうか？

ここで「地表にしても、その上に築かれる建築物にしても、またそこに住まう人間の身体にしても、すべては物質として存在しているのであって、究極的には人文地理学の対象は物質としてのモノである」と答えることは可能であり、そうした立場が物質論的転回と呼ばれる流れを足元から支えていることは確かかも知れない。最近でも、「地理学上の空間概念の一般的性格の把握とそれによる概念混乱の収束」(益田 2015: 363)を目的として掲げた益田は地理学上の空間概念の一般的性格として「視認可能な物質」(益田 2015: 379)と総括したが、果たしてそれは「客観的」で「物質的」なものであると言えるのだろうか³⁶⁾。

付記

この論考の内容は、メール雑誌『空間・社会・歴史』を通じた数々の議論に多くを負っている。1つのまとまった形にすることを勧めてくれたり、遅々として作業が進まない時期に叱咤激励をくれたり、時に新たな課題を提示してくれたりした読者の方々が居なければ、こうした形とならなかったことは確かである。感謝申し上げますとともに、期待に応えるような内容となっていないことをお詫びいたします。なお内容については、あくまで個人的な見解であって、議論に参加してくれた方々の意見と一致する訳ではありません。

注釈

1) 以下では、各論者が「物質性」などの用語を用いている場合に無理に表現を統一することはしていない。個別の論者の使用法に拘らず全体として論じる際に〈マテリアリ

ティ〉という表現を用いているに過ぎない。ここで〈マテリアリティ〉と表記するのは、「物質性」と表記してしまうことによる、materialの多義性が失われることへの配慮である。

- 2) 〈マテリアリティ〉と「モノ」との関連については、中島弘二が「ひとまず物質性を一般的な意味における「モノ」の様態と同義にとらえ」(中島 2014: 19)ているように、無関係とも言えないと思われる。ただしこの場合には、「モノ性」という表現も可能であろうが、ここでは〈マテリアリティ〉として論じていくこととする。
- 3) ド・マンの「物質性」については、土田知則が指摘しているように、「一つはこの用語を物質的・即物的なニュアンスから切り離し、あくまで理念的なものとして思念しようとするもの、そしてもう一つは、それを具体的なものとして——つまり、文字どおり「物質＝もの」として——思考しようとするもの」(土田 2013: 211)という二系列の解釈が提示されており、これ自体にも議論の余地がある。
- 4) ここで「物質そのものの性」と表現したことには、モノが備えている「大きさ」や「重さ」「厚さ」、「硬さ」や「可塑性」「弾性」といった物性、「酸性・アルカリ性」といった化学的特性などを総称している。ここには、カントが「物自体」として想定した人間主体からの他者性・不可知性も含まれているのかも知れない。
- 5) たとえば、「物質だけからなる世界」や「物質が存在しない世界」を前提とするならば、どちらの場合にも殊更に「物質の重要性」を主張する必要がない。ということは、「物質の重要性」が主張される形で我々が向き合っている世界は、「物質」と「それ以外」が混合している世界であることを示しており、そこには「何が物質であって、何が物質でないのか？」という線引きの問題が存在していることが理解される。
- 6) 福田が「ミラーは物質性をめぐる研究において影響力のある論者の一人」(福田 2008: 33)とし、森がジャクソンによるミラーへの参照をまとめて「地理学における物質の重要性は、まずはこのようにして浮上した」(森 2009: 8)と述べたように、文化地理学における〈マテリアリティ〉への注目にはミラーの影響力が大きかったと思われる。
- 7) ミラーの弁証法的な〈マテリアリティ〉の理解(Miller 1987)に対しては、物質的なものを本質的で先験的なものとしてみなすことによって、主体-客体の本質主義的な二分法に陥っているとするM. キアーンズ(Kearnes 2003)のような批判も存在している。
- 8) こうしたブラウンの指摘するモノの「無意義性」や人間を脅かす側面は、中島が「泥や黒い水が生を否定する無慈悲な「物質性」」(中島 2014: 21)や「人間存在の「否定性」として生起する物質性」(中島 2014: 22)としてモノの様態を捉えたことにも共通しているだろう。
- 9) ここで「再浮上」と表現したのは、人にとっての身体・道具あるいは環境・世界が物質的・実体的であることは、古代ギリシャの昔から考えられていたことであり、それ

- 自体が新しいことではないからである。しかし、(ポストモダン批判という文脈で語られることも多いからであるか) 人にとっての身体・道具あるいは環境・世界が物質的・実体的であることは、観念的な「主体」の自由を追求する近代的な人間観によって少なくとも脇に置かれていたとの批判を伴って、近年の〈マテリアリティ〉への注目は語られている。ただ、河合洋尚 (2013) において、認知された景観との対比で「本研究では、自然、建築物、公園、村落といったマテリアリティとしての景観(物理的景観と以下略称する)をどのように扱うかが議論的となった」(河合 2013: 22)とされているように、〈マテリアリティ〉が単に物質的であることを指していることもあるようである。
- 10) 古谷は、「物質性」に関するものとして、①「物質に備わっていて、人間との関わりのなかで発現する性質に関する問題系」=「世界は人間にとってどのような条件か」という問い、②物質世界が人間の身体機能である感覚を介して体験されるという「感覚性」との関連で「人間は世界をどのように体験し、どのように働きかけるのか」という問い、③「この世界」の普遍性という自明の前提を疑問視する「存在論」の問題系、の3つの問題系を挙げている(古谷 2012: 20)。ここにおいても、①の問いと③の問いでは、「この世界」の所与性という部分で差異が見られるように、3つの問いも整合的な統一体として問題系を構成している訳ではないのかも知れない。
 - 11) ここで注意が必要かも知れないのは、マクルーハン自身は「メディア」を単に「情報伝達手段」としてだけ捉えていた訳ではないということである。マクルーハンはメディアを「すなわち、われわれ自身の拡張したもののこと」(マクルーハン 1987: 7)であり、技術だとしている。「どんなメディアでもその「内容」はつねに別のメディアである」(マクルーハン 1987: 8)とも表現しており、メディアのメッセージは「それが人間の世界に導入するスケール、ペース、パターンの変化に他ならない」(マクルーハン 1987: 8)としている。こうした視点は、単なる「情報伝達手段」としてのメディアとは異なり、1つの技術によって現れた環境を捉えるような技術論・制度論であるように思われる。
 - 12) シャノンの情報理論のモデルについては、平田廣則のまとめを参照した(平田 2003: 2-4)。シャノンらのモデルは、通信において、いかに確実に大量の情報を伝送するのかという、ノイズに強い伝送を考える上でのモデルであって、今日でも「符号理論 coding theory」として知られている。
 - 13) こうした情報理論のモデルに批判的なメディアやコミュニケーションの捉え方を展開したものの1つとして、S. ホールの「エンコーディング/デコーディング」論が挙げられる。ホールの考えは、単一の主体として「送り手」や「受け手」を描くのではなく、それぞれを相対的な自律性をもった社会的過程として描くことで、「送り手=生産/受け手=消費」という図式も乗り越えようとする(吉見 2012: 91-95)。
 - 14) たとえば小林正幸は、電子メールを題材としながら「音や表情が伝わらないメディアの限界を超えようとする試みとして、絵文字が発達してきたように思えるのです」(小林 2001: 64)としている。小林は「相手に自分の感情を感じ取らせるものを「キュー」といいます。表情や動作など感情を感じ取らせるものが「キュー」です。このような表情などの「キュー」がないメディアを「キューレス」メディアといいます」(小林 2001: 20)としているが、同様の議論は、G. ペイトソンによって「メタ・コミュニケーション的メッセージ」(ペイトソン 2000: 259)と呼ばれるものにも見られるだろう。形式的にその場に表されている情報・メッセージ以外の、感じ取られる情報・メッセージが社会的な情報伝達において重要な役割を担っていると考えられるが、そうした要素の1つとして〈マテリアリティ〉も捉えられるのかも知れない。
 - 15) ここでの「テキスト中心主義」は、全ての対象を「テキスト」として読み解くことを方法とし、詩や古典といった「文学」を最上の文化作品と見なす伝統的な文化研究のあり方、文化を「テキスト≒文学」として捉えるような考えや規範として用いている。
 - 16) 「物質の意味は、物質自体に備わったものでも、私たちによって一方的に与えられるものでもなく、ある状況の中で私たちが物質に関わることによって生じ、多くの場合は無意識のうちに認識されるものなのだ」(前田 2009: 5)という主張の、「物質」を「テキスト」や「記号」といった単語に置き換えた場合の自然さは、まさにそうした拡張性を連想させないだろうか。
 - 17) ここで森が思い浮かべている「目的」が、モノの生産者側による政治的あるいは権力的な意図をもった内容を想定しているのか、モノを読み取る際に受け手側がモノに投影するような内容を想定しているのか、はたまた全く別の何かを想定しているのかについては、申し訳ないが読み取れてはいない。ただし生産者側の意図のような内容を想定している場合、生産者のメッセージを伝達する媒体としてのモノは透明性をもったテキストとしての性格を担わされているようにも感じられる。受け手側によって「誤読」することができるとしても、それは受け手側には多様な解釈が許されているということであり、モノに込められた「1つの意図」と受け手による「多様な解釈」という図式を描いてしまう。ありのままの現実 (presentation) ではなく、社会的に構成された、再-表現されたもの (re-presentation) を捉えようとする点では、「表象の政治学」である。
 - 18) こうした批判自体は、ある種の本質主義批判としての必要性は認められる。しかし、こうした「今までの前提は間違っていた」という批判は——アナル歴史学による『〇〇の誕生』や構築主義による本質主義批判がそうであったように——知れ渡ってしまえば、そうした批判自体が自明のものとなるような批判でしかないのではないだろうか。そういった点では、〈マテリアリティ〉を用いた批判が、「今までの所与の存在だと考えられてきた」対象の「構築性」についての意識を全面に押し出す形になり、

モノの〈マテリアリティ〉やメディアの〈マテリアリティ〉の中で指摘されていた、対象の持つ「非透明性」あるいは「思い通りにならなさ」というあり方に対する意識が弱められているような気がしないでもない。「我々の目の前に現れている様々なモノは、伝達される意味に影響を与えないような透明な存在ではなく、特定のメッセージ・意味と結び付けられた構築物である」という主張は、我々がどのような態度でモノと接するののかという認識論的・文化的局面だけでなく、人間としてモノをどのように知覚するののかという身体論的局面をも捉えるものとなりうるのではないだろうか。

- 19) フッサールの「像」についての話題は、ある物質の対象が「像」として見えてしまう不可避な局面をも議論の俎上に載せようとしているのに対して、〈マテリアリティ〉についての物質の本質主義批判としての構築性に関する議論では、像客体が浮かび上がらせるような人間と物質との不可避な関係を自明のものとしてしまっているかのような印象を拭き切れない。こうした局面は、〈マテリアリティ〉あるいは物質がメッセージを伝えていることとは無関係な話題なのだろうか。
- 20) 〈マテリアリティ〉に関するフェミニズムの動向としては、マテリアル・フェミニズムの動向も無視できないものであることは確かではあるが（たとえば、Alaimo and Heikman 2008）、本稿の目的と力能の範囲を超えるので、この点についてはより適切な論者の仕事を待ちたいと思う。
- 21) 身体観については、アフォーダンス理論も似たような批判を持っていると言える。D. ハラウエイ（ハラウエイ 2000）が技術・医療の拡大による様々な機器の身体への装着・埋め込みという時代的背景の中で「サイボーグ」という身体観を提唱し、皮膚を境界とする身体観への疑問を投げかけているし、ギブソンも「動物と環境との境界は皮膚の表面に固定したものではなく、位置を変え得るものだ」（ギブソン 1985: 43）と考えていた。こうした身体とモノの二元論に対する異議のような、「1つの皮膚によって閉じられた身体」という身体観への批判は、「人間-非人間」の連続性を主張する際の1つの論点となっている。
- 22) 「思い通りにならなさ」を、①「うまくいかなかった」場合の悲劇として捉えるのか、②そうしたものが運命的に含まれていると捉えるかで、〈マテリアリティ〉の透明性＝所与性が大きく変わってくるだろう。①の場合には、通常は「思い通りにならなさ」は問題にならず（意識されることは無く）基本的には〈マテリアリティ〉は透明と考えられるのであり、②の場合には、失敗は運命づけられているのであり「失敗を運命づけられた側面」自体（それは、人間の理性的振る舞いに対して制御できない外部性のようなものだろうか）が〈マテリアリティ〉ともいえるのかも知れない。こうした「思い通りにならなさ」を物質という対象と結びつける考えが、「我々の認識から独立した存在」という考えであろう。
- 23) 3つの批判は、相互に関連する内容を含み、それぞれが

独立した軸をなすものではない、あくまでも便宜上の分類である。またそれぞれの論者の用いる批判が、ここでの3つの批判のどの点に力点をおいたものとなっているかも異なっている。それでも「何も分からない」と言うよりは、多少の整理をしておいた方が後の議論のためには有用だと考える。

- 24) ここで批判されている対象を、「言語論的転回」や「ポストモダン」などとして表現することもできるかも知れないが、その場合にはそれぞれの方法論についての誤解を含むように思われるので、「言説中心主義」あるいは「テキスト中心主義」として限定した表現を採用した（以下では、「テキスト中心主義」という表現で代表して表記する）。言語論的転回については、哲学内部では「言語哲学こそが哲学の基礎理論だとする見方」（野家・門脇 2016: 70）と説明されている。「哲学の問題は元をただせば言語の不備や言語についての誤解から生じるのだという考え方であり、より積極的には、言語の「改革」あるいは言語についての「よりよい理解」が実現されれば、哲学の問題は解決（あるいは解消）される、という考え方である」（野家・門脇 2016: 68）という捉え方であり、この場合には「すべては言語的構築物に過ぎない」という相対主義とは無関係である。「ポストモダン」という表現にしても、二元論批判としても現れる近代批判という側面と「大きな物語」批判の相対主義的側面がありえることを考えるならば、その全てが〈マテリアリティ〉をめぐる議論と対立するものではないように思われる。
- 25) 当然ながら、こうした「テキスト中心主義」的な潮流に対する捉え直しは、様々な学問領域で見られる。たとえば森も「言説にのみ注目する文化論的転回の傾向」（森 2009: 6）や「文化地理学が表象や言説のみで政治学を語ることの問題性」（森 2009: 7）と指摘していたし、文化社会学では、長谷正人が1980年以降の日本の「人文解釈学的方法で、言説や記号によって作られる一連の「文化」現象の生起とその歴史の変容として社会を解読する」研究を「ポストモダンの社会学」とし、それが「それまで社会学が客観的なデータとして扱っていた社会的実態が、「言語」なり「言説」なりによって構築された「虚構」にすぎないことを暴露して回るような脱構築ゲームだった」としている（長谷 2006: 616）。2-1でも取り上げた青木保（他）（1997）や床呂・河合（2011）のように、文化の読まれる側面ではなく研究者によって書かれる側面を前面化した「ライティングカルチャー・ショック」を経験してきた文化人類学においては、自らの「民族誌を書く」という営みへの自省的／再帰的捉え返しの1つとして、単なる「知的流行」に留まらない切迫した問題として受け止められている側面もあるだろう。
- 26) たとえばマテリアル・フェミニズムにおいては、ポストモダンの思想が「リアルなもの／マテリアルなものはただ単に言語によって構築される。我々がリアルなものと呼ぶものは言語の産物であり言語にだけリアリティがある」（Alaimo and Heikman 2008: 2）と捉えていることを批判的に指摘している。

- 27) こうした批判は、哲学などでも立ち上がっている。たとえばQ、メイヤサーは、カント哲学以降の、「物自体」を不可知とし、主観性と客観性の領域をそれぞれ独立したものととして考える主張を無効にする考えを「相関主義」（メイヤサー 2016: 16）として批判している。メイヤサーの考えでは、「一面では、感覚されるものは主体と世界との関係としてのみ存在しているということが認められる。けれども他方で、対象の数学化可能な性質はそのような関係の制約を免れていて、その性質は、私がおの対象と関係をもとうとつまいと、私が思考するその対象のなかに実際に存在している」（メイヤサー 2016: 12-13）ということになる。こうした思想は、物自体のような「絶対的なもの」を捉えようとするものであり、自然科学の知識との共存を図ろうとするものである。メイヤサーのような「絶対的なものにアクセスできる」という考えも、我々には「〇〇についての言説・認識」しかアクセスできないという視点を批判するものとなっているだろう。
- 28) 「モノ」を扱う文化研究は、モノ＝道具の重要性を強調するのだが、「道具である」ということはどういうことかといった議論に関しては触れられることは少ないように思われる。野村雅一が「身体が道具化し、道具が身体化する」（青木（他）1997: 37）という側面を指摘しているように、道具と身体は「人間－環境」という連続体を考える上で重要な論点であることは確かである。そうしたなかでヴィゴツキーは、行為を媒介する道具を、いわゆる道具として用いられる「技術的道具」と、言語（文字や記号）、図式や図表、算術や記憶術など、行為をコントロールする内面的活動の手段である「心理的道具」に区別している（茂呂（他）2012: 45）。その上で、「こうした記号としての心理的道具を物質性（技術的道具）から切り離し、その差異を過度に強調することは、人間の記号過程を個人の頭の中に押し込め、物質としての媒介的道具が文化・歴史的協働活動の中でどのように創造されるかを捉え損ねることを意味する」（茂呂（他）2012: 45-46）と道具と記号の組み合わせに目を配る。こうした道具への関心は、実験器具や分析機器といった科学技術に関心を寄せる科学技術論や、ITの活用といった経営技術に関心を寄せる情報経営研究とも共通するものである。
- 29) デカルトは、実在的な世界と切り離して、心や意識を設定し、そこに赤い光や痛みのような体験の内容＝クオリアが現れるという発想を表現した。外界の事物そのものではなく、その「現れ」が知覚されると考えた。こうしたデカルトによる「物質－精神」の二分法は、長きに渡って西洋哲学や近代科学を支えてきた。それだけでなく人間／動物、男性／女性、文化／自然、理性／感情といった二分法も西洋近代を表現する思想的前提とされてきたが、これらは「主体／客体」という二分法と重なることによって、主とされる側が従とされる側を支配・搾取することを正当化する主従関係として描かれることになる。そうしたなかで「ポスト・ヒューマン」といった議論が、「モノのエージェンシー」をテコとして「エージェンシーagency」を人間の特性から解放し、人間中心主義的な世界観を転換しようとしていると言えるのかも知れない。たとえば、「人間社会はそれ以外の世界から切り離された状態では存在しなかった」（ワットモア 2017: 8）と考えるワットモアの用いる「人間以上（More-than-human）」も、ポスト・ヒューマンの流れに位置付けることができるだろう。
- 30) ここまで〈マテリアリティ〉という観点を強調するために、「物象化」あるいは「物質化」とされる問題については触れてこなかった。A. ホネットは、ルカーチの『歴史と階級意識』での定義を引きながら、物象化とは「人間と人間との関わりあい、関係が物象性という性格」をもつこと以外の何ものでもない、と述べているが（ホネット 2011: 19）、こうした「物質的」と考えられないものが「物質的」に振る舞う作用が〈マテリアリティ〉の問題に含まれていない訳ではないだろう。そういった意味では、ここまで概観してきた議論は「モノ」に関する〈マテリアリティ〉の問題を扱うことに特化しているとも言える。「物象化」あるいは「物質化」と〈マテリアリティ〉との関連については、マルクス主義理論における伝統が存在するが、それが現代的な文脈の中でどのような意義を持ちうるのかについては今後の更なる議論が待たれるものである。
- 31) こうした視点は、河合だけでなく、ギブソンのアフォーダンス理論にもブラウンのモノ理論にも見られる。視覚や触覚といった人間の知覚によって捉えられることが、人間による認識・思考とは独立の対象であることを意味すると考え、こうした点から我々の思考や現実世界を構成しようとするのは、今回の〈マテリアリティ〉に関する話題にのみ見られる特徴ではなく、「物質」を現実世界の基盤に据えようとする思考全般に見られる特徴であるかも知れない。A. セイヤーらによって展開された批判的實在論は、ヒューマン的な古典的経験論とカント的な超越論的観念論を乗り越えようとするR. バスカーの超越論的實在論（transcendental realism）に依拠する立場であるが、バスカーは、科学が科学的知識を社会的に生産するものだとしながら、その「対象物が、客体的な实在物として、人間とは独立に存立・作用している」（バスカー 2009: 8）ことも主張する。バスカーが「知覚対象が知覚活動とは独立に存在するという事実があってはじめて、「知覚」の意味内容やその認識上の意義は与えられる」（バスカー 2009: 30）と述べることは、知覚の対象である「モノ」たちの人間の認識や知覚からの独立を主張すること、それは「モノ」が所与の存在であることを表現している（同時にバスカーは「知覚のない世界が可能でなければならない」（バスカー 2009: 31）とも述べている）。バスカーは「人間の存在しない世界は決して不条理な妄想などでなく、科学という認識活動によって推定される一つの可能世界である」（バスカー 2009: 52）として、こうした不条理だと受け止める認識は「人間中心主義の発想が抜きがたく染みついている」（バスカー 2009: 52）からだとして批判する。バスカーにとって重要なのは、「この世界で現に科学が成立している事実をきちんと押さえた上で、もし人間がいなくなった場合、この世界について果たして

どのようなことを語りうるのか、を考慮することが大きな意味をもつのである」(パスカー 2009: 52) ということであり、人間が居なくなった後も自然の法則は変わらないと主張することである。こうした点は、メイヤス(2016)の「祖先以前」の議論にも通ずるように思われる。また、厳密には「現実が心から独立して存在するという主張」ではないが、「社会的実体には、人の心がつくりだす概念とは独立している実在性がそなわっている」(デランダ 2015: 5) として社会構成主義を批判するM. デランダも、人間の認識や心の働きから独立していることを「実在」の根拠とする説明を用いている。

- 32) ここではレーニンの物質概念の説明をモノの議論と適合する物質概念として取り上げたが、吉本秀之が『岩波哲学・思想事典』において、西洋哲学での物質概念について「物質の概念は、西洋の思想史における最古の概念的道具の一つだが、驚くほどの多様性または混乱を示している」(廣松(他) 1998: 1397) と指摘しているように、我々の用いる物質概念自体が混乱していることは確かであろう。〈マテリアリティ〉を語る以前に、「物質」においても明確な定義を述べるのが困難な状況がある。このことは「reality」という用語でも同じである。「reality」を哲学的に「実在性」という意味で読み取った場合、それは意識のうちに概念としてあるあり方としての「観念性 ideality」の認識論的な対概念となり、意識とは独立に事物・事象としてあるあり方を意味するとされ(廣松(他) 1998: 659)、日常的な「リアリティ」という用語とは異なる意味合いとなる。
- 33) こうした作用として知覚を捉えることは、客観的に実在している物質などの対象を原因とし、人の感覚器官がそれら対象の情報を受け取り、脳がその情報を処理した結果として知覚が生じる、とする知覚の因果説である。
- 34) こうした知覚の対象としての「物質」という視点は、西洋哲学の伝統において「一次性質」が、もの自体に内在している性質と考えられており、「私」の存在とは無関係に「ある」とされていることに関連している。メイヤスは「一次性質という語によって、対象から切り離すことができないと想定されるところの性質が理解されている。それは、私がそれを把握することをやめたときでさえ、そのものに属していると想定される性質のことである」(メイヤス 2016: 12) としている。「物質」には、それを捉える人間とは無関係な、そのもの固有の特質が内在していると考えられてきた。自然科学の知識に裏打ちされた客観的な実在として、確かな研究対象を研究者に提供するものが「物質」と言える。換言するならば、物質を扱うということは、テキストや象徴体系といった「虚構」ではなく、客観的な現実世界を捉えていることを宣言することになるのである。
- 35) 分かりやすい定義を求めることは、脱構築的思考が行き渡った現在の学問的状況においては「本質主義」との批判を受けるかも知れない。しかしそれでも、(その場その場の限定的なものであっても) 誰にでも接近できるような形で共通認識を求めることは、「何か専門家にしか分

からない用語を使って、分かった気になった議論をする」ことに比べれば罪は軽いようにも思われる。研究者同士による学問的議論というのは、お互いに相手がどのような札(概念・用語)を持っているかを知らずにブラフで競り合うようなポーカーゲームではないはずだからだ。もちろん、これはあくまで学界人ではない素人の「個人的見解」である。

- 36) J. アーリは1980年代からの「空間論的転回」の含意として「空間が断続的に動いているさまざまな物質(物や環境)で成り立っているとみなされていること」(アーリ 2015: 56) を挙げている。ここでこれまでとは違う視点を差し挟むことが許されるならば、2-3で触れたフッサールの議論を当てはめてみたい。研究者が——たとえば「地域」といった——「1つのまとまり」として対象を捉えるということは、どのような経験なのだろうか。「1つのまとまり」を捉えようと実際に現場に赴いた時に観察される様々な具体的な個物が「すべては物質である」として見出されることは、「物理的像」の経験である。しかし、絵画において物理的像として経験されるのが1つ1つの絵の具の筆致であったとして、それだけで「像」として意味のある全体が経験されている訳ではない。同様のプロセスが成立しているとするならば、個々の物質的な個物が経験されるからといって、そこに「地域」としてのまとまりを経験していることにはならないのではないだろうか。そこにある種のまとまりを見るプロセスとして「像客体」や「像主題」が経験されていることになる。このような推論が許されるならば、「地表にしても、その上に築かれる建築物にしても、またそこに住まう人間の身体にしても、すべては物質として存在している」ことをもって「地域は物質的な存在である」とすることは、結論を急ぎ過ぎていることになるだろう。こうした論理は、「もの」研究においては「もの」を言語的意味や象徴の次元のみに還元するのではなく、また逆に言語的実践を無視するというのでもなく、言語的実践それ自体の有するマテリアリティに注目していくことが肝要である」(床呂・河合 2011: 9-10) という指摘を「文字は紙の上のインクのシミである」や「声は空気の振動である」といった物理主義的な指摘と結び付けてみることと同じだろう。これらの想像力は、「人間はタンパク質など元素でできている」や「地球上の生命も素粒子から出来ている」というような、マイクロマクロに関するある種の還元主義に基づいているように思われるが、そうした部分への注目は部分に還元されない全体としての特性については何も語ってはいない。全体が単純な「部分の総和」であるならば問題とならないが、全体に創発的特性を見出す場合には部分とは別に全体としても語られなくてはならない。ここで取り上げた「地域」や「場所」が1つのまとまり=全体であるならば、部分=物質だけについて語ったことによって結論とする訳にはいかないのではないだろうか。

参考文献

- Alaimo, S. and Heikman S. (eds) 2008. *Material Feminisms*, Indiana University Press.
- 青木保・内堀基光・梶原景昭・小松和彦・清水昭俊・中林伸治・福井勝義・船曳建夫・山下晋司(編) 1997.『「もの」の人間世界』(岩波講座 文化人類学第3巻), 岩波書店。
- Appadurai, A. (ed.) 1986 *The Social Life of Things: commodities in cultural perspective*. Cambridge University Press.
- ベイトソン, G. / 佐藤良明(訳) 2000.『精神の生態学 改訂第2版』, 新思社。
- バスター, R. / 式部信(訳) 2009.『科学と実在論——超越論的実在論と経験主義批判』, 法政大学出版局。
- ブリア＝サヴァラン, J. A. / 玉村豊男(編訳) 2017.『美味礼讃』, 新潮社。
- Brown, B. 2001 'Thing Theory', *Critical Inquiry* 28-1, p.1-16.
- Butler, J. 1993. *Bodies That Matter: on the Discursive Limits of "Sex"*. Routledge.
- カロン, M.・ロー, J. / 林隆之(訳) 1999. 個と社会の区別を越えて——集団性についての科学技術社会論からの視座, 岡田猛他(編著)『科学を考える——人工知能からカルチュラル・スタディーズまでの14の視点』, 北大路書房, 238-257。
- デランダ, M. / 篠原雅武(訳) 2015.『社会の新たな哲学——集合体, 潜在性, 創発』, 人文書院。
- ド・マン, P. / 上野成利(訳) 2005.『美学イデオロギー』, 平凡社。
- エンゲルス, F. / 秋間実(訳) 2001.『反デューリング論(上)』, 新日本出版社。
- 藤高和輝 2015. パトラーのマテリアリズム, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要41, 193-212。
- 福田珠己 2008.「ホーム」の地理学をめぐる最近の展開とその可能性, 人文地理60-5, 23-42。
- 古谷嘉章 2012. 人類学がとりくむべき物質性とは何か, 民博通信136, 20-21。
- 古谷嘉章 2014. 人間学のキーワード: 物質性, 月刊みんぱく 38-1, 20。
- 古谷嘉章・関雄二・佐々木重洋(編) 2017.『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』, 同成社。
- ギブソン, J. J. / 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬受(訳) 1985.『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』, サイエンス社。
- 後藤明 2013. 序説: モノ・コト・時間の人類学——物質文化の動態的研究, 人類学研究所研究論集1, 1-32。
- ハラウエイ, D. / 高橋さきの(訳) 2000.『サルと女とサイボーグ』, 青土社。
- 長谷正人 2006. 分野別研究動向(文化)——「ポストモダンの社会学」から「責任と正義の社会学」へ, 社会学評論57-3, 615-633。
- 平田廣則 2003.『情報理論のエッセンス』, 昭晃堂。
- 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美士(編) 1998.『岩波 哲学・思想事典』, 岩波書店。
- ホネット, A. / 辰巳伸知・宮本真也(訳) 2011.『物象化——承認論からのアプローチ』(叢書ユニベルシタス956), 法政大学出版局。
- 生井英孝 2006. 視覚文化論の可能性, 立教アメリカン・スタディーズ28, 7-24。
- Ingold, T. 2007. Materials against materiality, *Archaeological Dialogues* 14-1, 1-16.
- 泉谷洋平 2003. 人文地理学におけるポストモダニズムと批判的実在論——英語圏における理論的論争をめぐって, 空間・社会・地理思想8, 2-22。
- Jackson, P. 2000. Rematerializing social and cultural geography, *Social and Cultural Geography* 1-1, 9-14.
- 香川秀太 2011. 状況論の拡大——状況的学習, 文脈横断, そして共同体間の「境界」を問う議論へ, 認知科学18-4, 604-623。
- 柏端達也 2017.『現代形而上学入門』, 勁草書房。
- 加藤幸治 2010. ローカルなコンテクストにおける民具の理解に向けて——四国・那賀川上流地域の天秤腰機を事例に, 東北学院大学論集『歴史と文化』45, 57-71。
- 河合洋尚 2013. 景観人類学——認知とマテリアリティのはざま, 民博通信143, 22-23。
- Kearnes, M. B. 2003. Geographies that matter: the rhetorical deployment of physicality?, *Social and Cultural Geography* 4-2, p.139-152.
- 小林正幸 2001.『なぜ, メールは人を感情的にするのか——Eメールの心理学』, ダイアモンド社。
- 久保明教 2015. 知能機械の人類学, 現代思想43-18, 88-99。
- Lees, L. 2002. Rematerializing geography: The 'new' urban geography, *Progress in Human Geography* 26-1, p.101-112.
- Leonardi, P. M. 2013. Theoretical foundations for the study of sociomateriality, *Information and Organization* 23, p.59-76.
- レーニン, V. I. / レーニン全集刊行委員会(訳) 1956.『レーニン全集 第14巻』, 大月書店。
- リヴィングストン, D. / 梶雅範・山田俊弘(訳) 2014.『科学の地理学——場所が問題になるとき』, 法政大学出版局。
- 前田修 2009. 石器のマテリアリティ——西アジア新石器時代における黒曜石の意味と役割について, オリエント52-1, 1-26。
- マクラーハン, M. / 栗原裕・河本伸聖(訳) 1987.『メディア論——人間の拡張の諸相』, みすず書房。
- 益田理広 2015. プラグマティズムに基づく地理学的空間概念の弁別, 地理学評論88-4, 363-385。
- 松井広志 2015. メディアの物質性と媒介性——模型史からの考察, マス・コミュニケーション研究87, 77-95。
- メイヤサー, Q. / 千葉雅也・大橋完太郎・星野太(訳) 2016.『有限性の後で——偶然性の必然性についての試論』, 人文書院。
- Miller, D. 1987 *Material culture and mass consumption*, Blackwell Publishers.
- 水島久光 2016. ミシェル・フーコーと「玉ねぎの皮」——デジタル・メディア社会の時空間機制論, 松本健太郎(編):『理論で読むメディア文化——「今」を理解するためのリテラ

- シー』, 新曜社, 22-44。
- 森正人 2009. 言葉と物——英語圏人文地理学における文化論的転回以降の展開, 人文地理61-1, 1-22。
- 森正人 2011. 変わりゆく文化・人間概念と人文地理学, 中俣均(編):『空間の文化地理』, 朝倉書店, 113-140。
- 森正人 2016.『戦争と広告——第二次大戦, 日本の戦争広告を読み解く』(角川選書568), KADOKAWA。
- 森川洋 2004.『人文地理学の発展——英語圏とドイツ語圏との比較研究』, 古今書院。
- 茂呂雄二・有元典文・青山征彦・伊藤崇・香川秀太・岡部大介(編) 2012.『ワードマップ 状況と活動の心理学——コンセプト・方法・実践』, 新曜社。
- 長野慎一 2015.「物質化」再考—バトラーによるブルデュー批判の先へ, 三田社会学20, 97-110。
- 中島弘二 2014. 泥、石、身体——身体と物質性をめぐるポリティクス, 空間・社会・地理思想17: 19-32。
- 野家啓一・門脇俊介(編) 2016.『現代哲学キーワード』, 有斐閣。
- 小熊正久・清塚邦彦(編著) 2015.『画像と知覚の哲学——現象学と分析哲学からの接近』, 東信堂。
- 大村英昭・宮原浩二郎・名部圭一(編) 2005.『社会文化理論ガイドブック』, ナカニシヤ出版。
- 大貫拳学 2003. ジュディス・バトラーにおける「身体」および「物質性」についての研究, 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要第56, 112-115。
- 奥野佐矢子 2006. 言語のパフォーマティヴィティによる主体構築に関する考察——ジュディス・バトラーの思想を手がかりとして, 教育哲学研究93, 85-101。
- Orlikowski, W. J. 2010. The sociomateriality of organisational life: considering technology in management research, *Cambridge Journal of Economics* 34-1, 125-141.
- 佐々木正人 1994.『アフォーダンス——新しい認知の理論』, 岩波書店。
- 島津俊之 1993. 社会空間研究の方法, 地理38-5, 52-57。
- Thrift, N 2008. *Non-Representational Theory: Space, politics, affect*, Routledge.
- 床呂郁哉・河合香史(編) 2011.『ものの人類学』, 京都大学学術出版会。
- 土田知則 2013. ポール・ド・マンと「物質性」に関する二つの解釈系列, 思想1071, 210-224。
- 上野直樹 1999.『仕事の中での学習——状況論的アプローチ』(シリーズ 人間の発達9), 東京大学出版会。
- アーリ, J. /吉原直樹・伊藤嘉高(訳) 2015.『モビリティーズ——移動の社会学』, 作品社。
- ワットモア, S. /オゴネック, N.・吉田倫子(編訳) 2017.「人間(Human)」と「人間以上(More-than-human)」——ハイブリディティ(混成性)という概念は環境を考える新しい方法となるか?, ER6(富士通総研経済研究所 経済・経営・技術読本), 6-11。
- 吉見俊哉 2012.『メディア文化論[改訂版]』, 有斐閣。